

林信海と萩

——雅号の由来と中島歌子について

1 はじめに

幕末の武蔵国入間郡赤尾村（現在の埼玉県坂戸市赤尾）の名主で国学者、歌人、林信海（はやし のぶのみ、文化元年―文久二年、一八〇四―一八六二）は、多くのすぐれた和歌詠草や雅文を残した^{注1}。しかし、刊行されたものはいまだ少なく、その事績はさほど知られていない。本稿は、信海の雅号について調査したところを述べるものである。

〔注〕

1 『詠草一の巻―九の巻』『詠歌記帳』『紅葉のしをり杉のしをり合巻』『はなのほひ』『めつらの旅日記』『旅路日記』等の著作がある。多くは、他の林家文書とともに埼玉県立文書館に所蔵されている。

2 桜園、山水亭

信海の雅号には「桜園」「山水亭」「芽子の屋（はぎのや）」があった。桜も芽子（ハギ）―萩も、信海の庭園に植えて愛された植物である。ただし、万葉集でハギは、「芽・芽子」また「波義・波疑・波伎」のような、いわゆる万葉仮名によって記される。信海が「芽子の屋」「芽の屋」等と記すのもその用字法による^{注1}。

信海の歌文集をひもどいてみると、それぞれの雅号の由来について自ら説明しているところがある。

「桜園」については、歌文集『詠草三の巻』（従文政十丁亥年、至文政十一丁子年、一八二七―一八二八）の冒頭文「春齋桜園詞」がある。この巻には、信海二十四歳、二十五歳の時の作品を載せている。「春齋桜園詞」は冊子の五丁余に及ぶ長文だが、その文章の一部を次に示す。（以下、引用文では適宜句読点を付し、または分かち書きにして読解の便を図った。推敲・添削部分は、特に注記せず、訂正後の語句のみを示した。）

水野 恵子

(前略) されはおたしくも、たのしくも、心をやしなふへき時は、春にこそあれと思ひよするから、そをもて家の名になんよひたる。又其のをりにあひたる桜よ。我国ふりのゆほひかなるを、木たち、花の色にあらはし見せたるを、いにしへのふ人、誰かはめてはやさ、らん。常に心を花のうへにおきて、めて見は、なのめにそこねたらん心ちは、やかても思ひまきれつへし。されは山の桜を園のうちにあまたひきうゑて、春は花のところとなし、やかて園の名にかけて、ともにをりわすれさなる、くさはひととして、かのをりくの心やりくさとはなしぬ。(後略)

「春斎桜園」なる名について、「心を養う春の季節と、穏やか(ゆほひか)な国風のそのままを表す桜樹桜花を愛して家の名にした。庭には山桜を多く植え、毎春の楽しみのおよびと説明している。

次に「山水亭」の号は、信海についての他の解説書類に見えないが、信海自身の署名や、親友の国学者者井上淑蔭が「櫻亭、山水亭にて雪を見つつ歌二首」などと、信海のその家と呼び、また書状の宛て名にもしている。^{注2}

『三の巻』と同時期の『詠草五の巻』(従文政十丁亥年、至文政十一戊子年、一八二七—一八二八)に「山水亭記」があり、その名の由来を述べている。題「山水亭記」の下には、小字で「おのか別館の記 文政十年十二月三日有所思書之」の書き入れがあるので、信海の二十四歳の文章であることがわかる。

山水亭記 おのか別館の記

(前略) 一、に高根のかたちをまねひて、園生に岩た、みしなし、み山木なとうつしうゑ、岡のすそわに清水をせきいれて、いは、し

などわたし、さてかたへなる家に、其名をそおほせたる。さるは、かく山水のたへなるあはれを、めつる心の其名と、もに、世々につたへゆきて、ともにくちせさらんことを思ひて也。(中略) あはれ此山水のさまよ。とほくさるさかひにあくかれず、ちかくそのふのもの朝夕にうち見て、かのをりくの心をなくさめ、思ひをやるにたれりと、すかれうたへらく、

嶋このむ世のなみとしも人や見んおもひとりぬる心たとらて

ここでは「友人とともに山野に遊び、酒を飲み歌を詠むことは、大きな楽しみであるのに、家業に忙しく、なかなかそれもかなわない。」と述べた後、「この度、庭に山水のしつらいをなした。これも、世のひとしなみの、糸竹酒杯の遊興にふける俗人の業とのみ、人には思われるだろうことが残念である。あくまでも、風雅の境に心を遊ばせ、和歌を詠むための数奇であるのに。」という。歌中の「嶋」は泉水ある庭園の「山斎」の意で、「並(波)」が、その縁語である。

現在の林家邸宅は改築されているが、石庭は残されている。旧邸の絵^{注3}図を見ると、山水を配し、石組みある広大な庭園が描かれている。「己が別館」なる「山水亭」というのは、二階建文庫蔵に続く、中庭に面した、同じく二階建の建物を指すのだろうか。度々歌に見えるように、そこは信海が「高殿のおばしま」によつては園の景色を楽しみ、また、友人を招いては歌会を催したところであった。

[注]

1 「萩」の字は中国にあるものの、カワラヨモギ・ヒサキ等の別の植物を指し、日本のハギではない。「萩」は秋にもっともふさわしい草花として意味

を合成、日本人が作った国訓の漢字である。「萩」の用法が定着したのは平安時代からであって、万葉集ではこの字はない。解説書類に信海の号に「茅子舎」、よみを「かやのや」とするものがある。蔵書印の「越水辺茅子舎」(越水辺ほとりの茅子舎の意)が、篆刻では「越水辺茅子舎」のように見えることからか。(拙稿「林 信海の雅号をめぐって」桜と萩『言語と交流』第五号、凡人社、二〇〇二年)

2・林信海「井上淑蔭かたはふれにものしたる物語の序」(『愚作歌文 雑記 全』(埼玉県立文書館蔵)

・淑蔭「櫻亭、山水亭にて雪を見つつ歌二首」(同館蔵)

・淑蔭「入間郡赤尾村 林信海あて書簡」(『新編埼玉県史』資料編12 近

世3 文化、一九八二年、九七九―九九九頁)

3「林家屋敷絵図」(埼玉県立文書館「武蔵国入間郡赤尾村 林家文書目録」写真、一九八六年)

3 萩の庭

信海の最も早期の作品集、『詠草一の巻』(従文政六癸未年、至文政九丙戌年、一八三三―一八二六)から、庭園のハギについて記した歌を一首引用する。^{注1}『一の巻』には信海が二十歳の時から、二十三歳までの作品が集められている。

園生なる萩をよめる

秋されは めもあやなせる から錦 むかしみもひて をちこちの
野へにあさりて 我宿に 庭もせきまで ひきうゑし ちくさやち
くさ 此頃の あかつき露に おしなへて ひもときそめて おき
そはる 露に匂へり 朝夕に 我いて見れば 朝されは 朝露おき

夕されは 夕露おく やちくさの 花はあれとも 朝露の おきた
るさまも 夕露の おきたるさまも そかなかに わきて見ゆるは
秋はきの花

反歌

白玉の露によそへるさま見れば萩にまされる花なかりけり

ここは「秋が来ると、色とりどり唐錦のように美しい姿を喜び(むがしみ思ひて)、あちこち探し求めて、自分の庭園に移し植えた、たくさんの草花を朝な夕なに眺めている。が、その中でかくべつ美しく見えるのは、萩の花だ。白玉の露に映える萩、その花に優る花はない。」とハギの美しさを讃えている。ハギを歌う作は、『一の巻』の初めから多い。外にも、「秋はきの咲にほひたるわか庭に」(題「八月十五夜、人々つとひけるに空いたくくもりにはければ、よみていたしける歌并反歌」)、「秋萩の咲匂ふ宿の我宿に」(題「八月二つありけるとしの秋、のちの八月十五夜、人々つとひて月のあそひしけるをりによめる」)のように、庭園のハギが歌われている。

しかし、これらは庭のハギそのものを歌うものであり、家の号としての「茅子の屋」「茅の屋」が出てくるのは、『詠草二の巻』(従文政八乙酉年 至文政十丁亥年、一八二五―一八二七)、(信海二十二歳―二十四歳)からのようだ。「四月はしめつかた、おのか茅子の屋に人々つとひて、題をさくりて歌よみけるに、人伝時鳥を」が初出で、「おのか茅の屋にて、人々と、もに初秋風を」などと、自分の家をはっきり「はぎのや」としているのを見る。

また、ハギを万葉仮名「茅子」「茅」と書くのは、雅号の場合に限っている。植物、花として取り上げる場合は、詞書や歌でも、「萩をよめ

る歌并反歌」「秋はきのまはきの花の咲く花はあやなす色のからにしき」「しら露もまたおきあへぬ萩はらや秋とつけたる風のす、しき」のように、漢字「萩」か仮名で表記する。

『詠草二の巻』の用例で見ると、「芽子」「芽」表記は「おのか芽子の屋」の六例、「おのか芽の屋」の三例、「我芽子の屋」の一例で計一〇例ある。

植物、花を指しての用法は、仮名表記「はき」は七例（秋はぎ・まはぎ 二例、はぎ・小はぎ・糸はぎ 各一例）である。

漢字表記「萩」は二九例（萩 一八例、秋萩 八例、ま萩・小萩・萩はら 各一例）である。二の巻は百三十余丁だが、全体的に見てハギの歌は多い。

信海はこの庭園のハギを一人で見るのは惜しいと、友人を呼んで心ゆくまで觀賞する。

文月十六日我許に人々つとへて萩の遊びしけるをりによめる歌

并反歌

（前略）秋萩の 名におふ宿の 我やとに 時しもきぬと 錦なす垣ほもたわに うちしなひ 花こそさけれ おのかとき 今そえかほに 玉なして 露おきわたす ひとりのみ 見るにあかねはもろともに 見はやしなんよ（後略）

「名におふ宿」は、「名として持つ家」、すなわち「ハギの名を冠した家」すなわち「はぎのや」に、今はふさわしい花の盛時であるというのだ。そして、庭には新たに加わったハギもある。

同じをり人々日もや、くれなんとす、いさやといひ出たる時に

よみていたしける其歌并反歌

天雲の むかふす国の みちのくに 名たゝる花と うつせみの此世の中に かをりみち にほへる萩と 我園に ねこしうれと所から 色香のなげに 秋の来て 咲そめにけり しかはあれとたまあへる友の 咲いつる 花見まほしみ 咲匂ふ 香をゆかしみと かきつらね けふの此日に とひ来つる ことそうれしき（後略）

「ハギは雲が遠く伏して見える空のかなた、陸奥から根ごと掘りあげて移し植えたものであるが、現に今武蔵野のこの地に咲き始めた花の色香は、いかにも乏しげだ。しかし、親しい友人がおおせい、わが家のハギに心を寄せて訪れてくれたのはうれしい。」と歌う。

同じく林家文書には、別に信海の友人がハギを歌った文書数通があった。

詠萩長歌短歌

政之

をとつへ むさしの国の むさしのに 咲にほふ萩は 八百万 千よろつあれと 山河の へなれる国の みちのくの みやきの、はらの 秋はきに あにしかめやと 君か屋に うす、まり みるしもつへの 人におふせて いゆかしめ 根こしにこして はろくに、うつしうゑたる そのはきの うまし真はきを 高とのにのほりてみれば ほつえには つゆをぬきなめ しつえには 霧をにほはし ともしくも 所せきまで みそのふに 咲匂ひけり うれしくも さきくもわれは 行水の おとにのみきく さす竹のみやきの、萩を けふみつるかも

反歌

みそのふの うましそのふに にはふはきを あからめもせず
てにめてけり

辺土の武蔵野より、まだはるかに隔たった（へなれる）陸奥の、名高い宮城野のハギの美しさを眼前にして、ただただ花を見つめるのみと讃えている。政之の萩の歌は、もう一首ある。（題「みそのふの萩をみて、よめる 長うたみしかうた」）

作者政之は、利根川氏、川越城下に漢学を講じた人である。^{注2} 信海は、先に自園の花を謙遜して歌っていた。が、政之の歌によって、信海は庭に植えた、幾種類ものハギにも満足せず、家の使用人に命じて（うす、まり みるしもつへの 人におふせて）陸奥の歌枕の「宮城野の萩」をはるばる掘りとつて来させたという事情が明らかになる。

外に藤原周之の「詠風前萩長歌并短歌」、藤原英篤の「あきされはまつさきにほふ はきの屋に 思ふともとちまとゐして」に始まる長歌、^{注3} 反歌もある。

これら三人の客人の歌はいつ作られたのか、日付を欠くので明確にできない。が、人々は「高き屋」からの庭を眺めを、しきりに嘆称している。歌は互いに似た表現があることから、「芽子の屋」に新来のハギの咲く同じ時の作で、これらの歌は歌会の主への挨拶としたもののようにも思われる。

〔注〕

1 埼玉県立文書館蔵。

2 川越市教育委員会『川越の人物誌』第2集（一九七六年、四二頁）

林信海『愚作歌文雑記 全』によれば、利根川政之は、川越藩主秋元但

馬守の家臣で、一八四二年（天保一三）、正之が藩主秋元氏の領地山形に移るまで、信海との交流が続いた。

また、『めつらの旅日記』には、文久元年（一八六一）、信海が横浜旅行から戻ると、政之が二十一年ぶりに信海の家を訪れていた。この邂逅を喜んで、日記が「めつらの」と名付けられたという記述がある。（狭山古文書勉強会編、林信海『めつらの旅日記』狭山古文書叢書第十九集、二〇〇二年、一一二頁）

3 周之は信海より年上の歌人で、武蔵国比企郡福田の里に住み、英篤も同じく清水浜臣門。

3 萩への思い——歌と生活と

さて、信海が、自家を「芽子の屋」と命名したことについては、みずから『詠草二の巻』（従文政八乙酉年 至文政十丁亥年、一八二五—一八二七）、（信海二十二歳—二十四歳）に次のように記している。

少し長いが、次に引用する。

おのか芽子の屋の記

いてや、うつせみの世に生まれ出ては、人毎に、たかきみしかきけちめこそあれ、品こそわかつて、おのかし、身にとりては、なすわさのいとまあかなん、あらさめる。されはしつたまき、いやしき、ひなのかたゐなかにすめるおのれ、なりはひわさをつとむるに、いとなきものから、おふけなきさかありて、しはしも、いとまのひまあるをり毎に、書ともくりかへし見て、いにしへのみやひ人の心をしたひ、又をりにふれたる木草もろくをうち見て、あはれと心にくめつる、さかなんありける。さる心から、いそのかみ千世ふる道の

跡とめて、ちはやふる神代のこととをも、あふきたふとみ、ゆう日
かけ、くたちの世の今の、ひなひし心にも、かしこくたへなりし、
其みよのみやひに、つゆはかりも、なりはひなんものとぞ、思ひか
まへにける。やち草のたくひおほかるか中には、秋萩をしも、わき
てあはれに、ことなるものと、いたく見めつるからに、むくらふの
露ふかき、まかきのあたりに、うゑなへて、さてそをもて家の名に
もおふせて、朝夕の心やりくさになんしける。そもくおのか家の
なりはひわさとて、鶯の来鳴春へは、霞にかへす田の面に立つかれ、
土さへさけぬへく、てる夏の日も、田草ひくと、ひねもすにあせか
きくらし、雁鳴わたる秋されは、みのるたりほをかりあげ、かりほ
し、みゆきふる冬にいたれは木こり、しはかり、なはなひなど、お
のが家のなりはひわさとて、いそしみつとめつ、も、あまたの年月
をなんおくりむかへにける。おほたから「マ」、さる身のたのしか
るは、朝にくさきりにいてたつとては、かの垣ねのあたりに、しは
しとて、立ちよりつ、も、朝日のはなやかなる影に、もてはやされ
たる匂ひをめて、夕に家にかへりても、猶その垣ねにたもとほりつ、
ゆふ月夜をかしき影の高根にいりて、夜の錦となさんをしみ、そ
の朝夕におく露の、たまゆらのまも心をなんやりにける。いてや、
今の世のなほくしき、つね人の心くせとて、こままくら、たかき
とのをあふき見ては、いかて、さるありかをこそと思ひねかひ、あ
やにしき身にまとへる人を見ては、いかてさる身にこそはと、うら
やみ思ふなる。かれうつしみの世を、ふるまで、一時の心やすらけ
きをりなん、あらさめる。おのれはた同じ世の人のつらなれば、を
ちなき心にも、さるうらやみねかふこと、なきにしもあらねと、お
のかこのめるわさの、うれしきは、心をうら安国の古へにかへしつ、
も、思ひかうかへ見れば、さることを何かはうらやみねかはん。又

高きみしかき、おのかし、身のほとくにつけ、すみかのきはく
につけて、身のやすかる心の、たのしかるをおもへは、うつゆふの、
さく、るしき、おのかふせやも、いふせしとおもひたらず。つる
はみの、なれにし衣の色なきをきて、あやにしききたらん人に立ま
しりぬとも、何かはやさしとおもはん。か、れは、うしとおもへる
ふしもなく、おのつからにこそ、心たらひにたれ。かくもおもひと
りぬる心のすさみに、もえいてし若葉の春へより、しけりゆく夏を
へて、おほしたてつ、も秋の来て、咲すさひたる頃のあさけ、書見
る窓より見いたせは、枝もたわ、におきたる露に立はえて、いと、
香もまされるこ、ちし、かつ白玉もて、かこふまかきとも見ゆるは、
ふせやににけなきさまなりや。夕まくれ、そよふく風に袂にほはせ
つ、も、庭におりたては、めもあやなせる錦と見え、たもとほる心
には、たまたちきるとのみなん、おほめかれける。又有明の月まち
いて、見たるさまこそ、ことにいはんかたなうはあれ。まつあか
つきかけておく白露に、花ともうちしほれ、かつ月影に露と、も
に、みか、れたるか、うちしめれる香のあかつき、風のをりく匂
ひあひたるなど、時としてなかめに、あくよもしらすおほゆるは。
まことに、ことくさのたくひにはにぬ花そと、おもふこ、ろに、ひ
るのま高き屋にのほりて見れば、かたくくに咲にほへるか、ことに
た、ならず見ゆれば、

秋萩の咲匂ふ頃は錦あやのなかにこもれるところ也けり

となかめいてつ、思ひをやり、かつ心をそなくさめける。か、るす
さひのあはれたのしきかも。

「しつたまき（倭文手纏）——『いやし』に掛かる枕詞」、「うつゆふの（虚木綿の）——『さ』に掛かる枕詞」等の耳遠い古語があるが、主張は明らかである。「農に従事して日々忙しく働く自分は、卑しい田舎人に過ぎないが、身分不相応にも寸暇を惜しんで古の書を読み、古き代を尊び風雅を学ぶこと、そして四季おりおりの草木を眺め楽しむことを喜びとしてきた。数知れぬ草の中で、とくに好むハギを庭の籬にも植え、家の名にもし、この花を朝夕に眺めることが、なによりの楽しみである。農にいそしみ、日々心安らかに暮らす身にとっては、豪華な家に住まい、贅沢な衣服を身にまとう人を羨む気は少しもない。春は若葉の、夏は緑に茂りゆき、そして秋は、枝もたわむほど置いた白露で飾られるハギ。朝露に香もますます映え、錦を思わせる豪華な花のさまは、貧しげな我が家に不似合いなほど。そして夜は月影を浴び、露に磨かれた花と香の美しさ。思えば、まことにハギは他とは異なる美しい花である。秋ハギの咲き匂うころは、わが身もまことに豪華な錦綾の中に包まれているような、すばらしさに心慰められる。」と述べ歌っている。

ここには、よく知られている秋ハギの美しさの外に、垣根に植えたハギの、春の若葉の輝き、夏の茂りの美しさ、秋の夕べ、夜になおまさる花の色香などをいい、ハギを心から愛し、身近に観察している人の新鮮な感動がある。

信海は万葉集を初めとする古典や本居宣長『古事記伝』四十四卷、加藤千蔭『万葉集略解』二十卷等、研究書を読み進めている。『詠草一の巻』には、「万葉集なら長歌を書き集めをへける時の歌并短歌」、「古事記伝よみて思ひつ、けける歌并短歌」の題名の作品があり、『詠草二の巻』には同じく本居宣長の『直日霊』『葛花』を読んでの長歌、反歌がある。「万葉集略解よみをへける時のうた并短歌」「万葉集略解よみをへける時人々とひて竟宴しけるをりよめる長歌并短歌」（『詠草一の

巻）とあるように、信海の周囲には同じ志の友人がおり、ともに讀書し、切磋琢磨して学問に励んだことがわかる。

「おのか芽子の屋の記」の前には、文政八乙酉年（一八二五）と注記ある「四月廿八日おのか芽子の屋に人々とひけるをりの記」が置かれている。これは友人たちが集まり信海の結婚を祝うまどいの折の文章と歌である。この時、信海は数え年で二十二歳だった。「おのか芽子の屋の記」は、この直後にある。このことから文章は、たんに命名の由来を述べるのみならず、結婚を期としての、今後の学問と生活への、信海その人の思いが述べられているように思う。「芽子の屋」とは新家庭の家居に名付けたものではないだろうか。

なぜ、信海がハギの花に最も心引かれるのか。それは、ハギが万葉集で歌われた最多の花であり、かつ身近な武蔵野のどこにも見られる美しい花であったからだろう。「芽子の屋の記」には、農事と家代々の名主の職務を果たしつつ、古学、和歌の道を辿りゆこうとする静かな決意が感じられる。

〔注〕

1 万葉集の花では、ハギは集中一四二例（題詞のみのもの一例）である。

次に多いものとしては梅で一一九例、以下、松一八〇例、橘・菅一約七〇

例、桜一四一例（題詞三例）のようになる。（青木生子・橋本達雄『万葉言葉辞典』大和書房、二〇〇一年）

3 萩の舎と中島歌子

さて、信海の号「芽子の屋」ハギノヤからすぐ思い起こされるのは、樋口一葉の歌の師、中島歌子の歌塾「萩の舎（ハギノヤ）」の名ではない

だろうか。実はこの中島歌子の出身地は、権田恒夫氏が指摘されたように、信海が住んだ入間郡赤尾村に近い同郡森戸村である。

同じくハギノヤの名を持つ、中島歌子と信海には、何かかわるところがあるだろうか。次にこの疑問について考えてみたい。

中島歌子の父中島又右衛門の出身は入間郡森戸村、歌子の母いく子の実家の福島家は同郡戸口村であり、各々高麗川沿いの上流と中流沿いの村である。信海の赤尾村は、それより下流で、高麗川が流入し、さらに都幾川が合流した、越辺川に沿う村ということになる。現在はこの三村とも埼玉県坂戸市に属しているが、当時は赤尾村のみ川越藩に属し、戸口村は旗本の知行所、森戸村は天領であった。

しかし、このように支配形態は異なっても、そのころ既に森戸村、戸口村ともに城下町川越の経済活動に密接につながっていた。以下、藤井公明氏『続樋口一葉研究 中島歌子のこと』によって記すが、村名主で幕末には豪商であった中島、福島家の発展の背後にも川越藩主一門との深い関係があったという。

中島歌子の経歴を概略すれば、歌子は、弘化元年（一八四四）、父の家のある森戸村に生まれ、幼時江戸牛込、揚場町の家に移ったらしい。嘉永五、六年（一八五一、二）ごろ、父又右衛門は水戸藩上屋敷に近い、小石川安藤坂にある水戸藩の郷宿池田屋を買収して、家族とともに住むようになる。宿屋である池田屋の半分以上は中島家の豪華な居宅で、庭の築山前栽にはハギが多く植えられていた。これが後に歌子の歌塾「萩の舎」と呼ばれる所である。

父又右衛門は水戸の藤田東湖や勤皇方の人とも交際があり、その縁で歌子は十歳から十五歳まで水戸分家の松平播磨守の奥に仕えた。そして、歌子は十八歳の時、水戸藩士、林忠左衛門と結婚するのだが、元治元年（一八六四）、二十五歳の夫忠左衛門は天狗党の乱において自害してしま

う。

明治になり、歌塾萩の舎を開いた歌子は、父の活動や、母の川越藩奥への出仕の縁につながる、上流・中流階級の多くの女性を弟子に集め、歌人として名高くなる。明治十九年（一八八六）樋口一葉が入門したころは、萩の舎の最も盛んな時で、門下生は千人を超えたという。

さて、林信海については、『めつらの旅日記』の文久元年（一六八一）の記事を辿ってみよう。横浜旅行の帰路、信海は江戸永田町の大村藩上屋敷に出仕していた娘と会っている。日記によれば、信海の宿はその小石川水道町安藤坂の池田屋ではなかったが、同じ小石川で、「小石川極楽水といふ名水わきいつといふ御屋敷内大倉某か家にいたりて」そこで二泊している。前もって予定してあったものらしく、そこにはすでに息子、林信徒からの手紙も届いていた。

海山のあたりなめよいかかなりしききくらしたる五月雨の空

手紙には、このような旅路の父を気づかう歌も添えられていた。

さて、この「御屋敷」はどこかということを考えてみる。湧水「極楽水」はもと家康の母お大の方を葬った宗慶寺の境内にあったものである。後にその墓所が伝通院に移されると、宗慶寺裏の松平播磨守の屋敷が拡張されて広大な庭園が造営された。極楽水はその邸内に取り込まれてしま

まうのである。

信海の泊まった「御屋敷」とは、伝通院裏手で池田屋にも近い、この松平播磨守の上屋敷をさすのではないか。信海は、この屋敷に旧知の大倉某を訪ね、辞去に際しては、「此御屋敷内深谷某か妻は、我里近き比企郡野本村に生れしか来て故郷へ御供してまゐらんをなといふに」、拒み

これを中島歌子の経歴と照らし合わせてみると、歌子が少女時代に仕立していた松平播磨守屋敷奥というのが、その「御屋敷」ということになる。意外なところでの両者の行動の交錯だが、信海、中島歌子の郷里は、水戸藩、松平家と関係が深かったのだ。^{注1)}

また、林家文書中には、天保七年（一八三六）、森戸村又左衛門が、赤尾豊吉その他に出した、水車関係貸金受け取り証の「覚」一通があった。^{注2)} また、高麗川沿岸村々の水利関係文書の中には、森戸村・戸口村・赤尾村の名の見えるものもある。^{注3)} これは村においての経済的交渉を示す例になろう。

〔注〕

- 1 権田恒夫「解説〔付〕（四）中島歌子」（狭山古文書勉強会編、林信海『旅路日記』狭山古文書叢書第十七集、二〇〇一年）
- 2 藤井公明「中島歌子の先祖たち」（『続樋口一葉研究 中島歌子のこと』、桜楓社、一九八三年、一三頁―一六〇頁）による。
- 3 歌子の母、戸口村福島家のいく子は川越藩奥に出仕したのち、森戸村の中島又右衛門と結婚する。福島家（屋号、網谷）は隣村の上吉田村（高麗川と越辺川との合流地点）の江戸通いの船を利用して物産を送り、江戸と直接商売をしていた。中島家も代々名主を勤めた豪農、また織物等を扱う商業に携っている。いく子の父（歌子祖父）福島保太郎は幕府御用達になり、夫の又右衛門は江戸表の網谷の店の代表となって活躍した。
- 4 天保十二年（一八四一、一説天保十三年）、日本橋北鞆町生まれ説もある。（塩田良平「一葉伝記考証」、『大正大学研究紀要』第三九集、一九五四年、六四頁）
- 5 北鞆町には網谷の出張所があったか。（藤井氏、前掲書、四〇―四一頁）
- 6 藤井氏は、萩の家は安政二年（一八五五）の大地震の後、父中島又右衛

門の全盛期、安政五年（一八五八）ごろに造られたものかとされる。弟子の樋口一葉や、三宅龍子は、豪奢な家や萩の園のあり様を記している。（藤井氏、前掲書、一二五―一二六頁）

もとよりせまからざる家の又去年にことしとたてそへたる室どもかぞふれば十にもちかゝるべし。庭はたくだ（糞駝）が手を尽くし、家の内のかざりにこがねををしまねば、物と、のひてたらざる処もなし（『塵中日記』明治二六年十一月十五日、『樋口一葉全集』第三卷（上）、三三九頁）

5 江戸では大倉某宅二泊、上野山下の崎玉屋一泊で、計三泊のようだが、日記の日付に齟齬がある。（狭山古文書勉強会編、林信海『めつらの旅日記』狭山古文書叢書第十九集、二〇〇二年、七五―八一頁）

6 水戸藩分家の常陸府中藩上屋敷。徳川頼房の五男で、水戸光圀の弟の松平頼隆（一六二九―一七〇七年）が一家を立てる。（木村礎、藤村保、村上長『藩史大辞典』第2巻、関東編、雄山閣出版、一九八九年）

7 現在は共同印刷株式会社所有。（『文京区史』巻二、一九六八年、三五八―三六三頁）

8 狭山古文書勉強会編『めつらの旅日記』（七七頁）

9 川越藩主となった松平家の祖は徳川家康第二子結城秀康五男直基で、越前松平家の分家である。明和四年（一七六七）、五代朝矩のとき入封。第十代藩主は水戸、徳川斉昭の八男直侯が前藩主典則の養子となって継いだ。（藤井氏、前掲書、五〇―五五頁）

10 「覚」（埼玉県立文書館蔵）。

11 「史料解説」『坂戸市史』近世史料編Ⅱ、一九九一年、二四―二六頁）

4 加藤千浪と歌子、信海

以上、地縁的關係を見たが、中島歌子の歌塾「萩の舎」と信海との直

接的關係は、今のところ見いだせない。

両者の生没年は、信海は文化元年（一八〇四）―文久二年（一八六二）、中島歌子は弘化元年（一八四四）―明治三十六年（一九〇三）で、信海は中島歌子より四十歳年長である。信海の没した五十九歳のとき、歌子は十九歳で、前年の文久元年（一八六一）に林忠左衛門と結婚している。歌子は幼少より学問、和歌を学んでいたが、歌人としては若く、すでに一家をなしていた信海とは特別な機会でもなければ、交渉はなさそうだが、ただ間接的に信海と歌子の両者に関わる人物として、加藤千浪の名が挙げられる。

中島歌子の歌の師は初めは、水戸の国学者で歌人の林甕雄であった。その没後、慶応元年（一八六五）ごろから、歌子は加藤千浪（文化七―明治十年、一八一〇―一八七七）について歌を学んだらしい。歌子は後に千浪門の先輩伊東佑命を通じて、御歌所所長、高崎正風の知己を得る。萩の舎の繁栄はこのことに大きくあずかっている。^{注1}

加藤千浪は、奥州白河出身の人で、通称弥三郎、号を萩園といい、江戸に出て萱場町に住んだ。千浪は、歌は岸本由豆流に学び、和歌及び書道にすぐれ、特に詠史歌に名があった。^{注2}藤井氏は、加藤千浪の住居が、網谷の江戸揚場町の店からは遠くないことから、歌子の父と早くから知り合っていたかもしれないとする。^{注3}

信海と共に国学と歌作に励んだ従兄弟で、同年の親友、井上淑蔭は江戸に出て清水浜臣に学んだ。二十一歳のとき師は没したが、その後も養子の清水光房や加藤千浪・朝田由豆伎・本間游清とは親密な交遊があった。^{注4}

淑蔭の『櫻亭隨筆』の江戸遊学中の文章には、萩園、加藤千浪が度々登場する。そこでは、学問の志を同じくする若者たちの、隔てのない、楽しい交遊の様がうかがい知られる。^{注5}

後年、淑蔭は村近くの川島の新堤の桜を賞し、近郷多数の歌人の歌に江戸歌人の作も加えて、歌集『めくみの花』を版行した。安政六年（一八五九）のことである。そこには井上淑蔭の序、跋文、長歌、今様各一首、林信海の短歌、長歌各一首、子の信徒の今様歌一首等が収められ、また江戸の清水光房や加藤千浪の歌も一首ずつ見える。^{注6}

信海も淑蔭と同じく、清水浜臣、光房に師事した。信海の『詠草』九卷中、一の巻より七の巻までは、光房の批評や添削の筆がある。

当時、江戸の歌人と、近郷の熱心な弟子たちの輪は広がり、文学的交流は盛んだった。^{注7}淑蔭と加藤千浪は江戸遊学を縁とした友人関係であるが、信海にもその交流は及んだと思われる。『江戸文人事典』林信海の項の「加藤千浪と交遊」の「千浪」（二七三五―一八〇八）は「千浪」とすべきであろう。

〔注〕

1 塩田良平「二葉伝記考証」（大正大学研究紀要）第三九集、一九五四年、六七―六八頁）

2 『国書人名辞典』（岩波書店、一九九三年）

3 藤井公明『続樋口一葉研究 中島歌子のこと』（桜楓社、一九八三年、一―一五頁）

4 『埼玉県史』通史編4 近世2 文化（一九八九年、一〇七八頁）

5 井上淑蔭『櫻亭隨筆』（抄）（埼玉県史）資料編12 近世3 文化、一九八二年、七一―七頁）

卯月初つかた加藤千浪・朝田由豆伎と、もに清水氏をとひけるに、主よるこびて酒肴取まかなひ何くれとなく居立あるじしたり、越後国長岡の守の殿より給はりたるなりとてわかめを酢にて調じ出ぬ、其味よのつねならずといたくめでくひけるに、さばかりうましと思ひ給ハ、聊わ

かちまゐらすべしとて千浪・由豆岐にあたへぬ、とりあへず千浪「はる
く」と越の海なるくはしめをくむやなさけのつまになさはや、由豆岐「八
千年も老せぬ君が心ざし我もわかめのなをやらはむ」(後略)

6 井上淑蔭編『めくみの花』(『埼玉県史』前掲書、七九三—八〇八頁)
〔泊酒舎にてよめる若海藻の歌〕

(半三郎・入間郡赤尾
林 信海)

あかすして今日もいつしか暮れにけり花に短き春の日にかけ

(江戸)
加藤 千浪

咲つ、く花のしからみかけとめて水ももらさぬ河島の里

(江戸)

清水 光房

花も根にかへらぬ斗にひつ、ミふミかためなん遊ふ諸人

井上 淑蔭

をちかた人にとはねとも 匂ふにそれとしら雲の さくら色なる

朝ほらけ ひと筋比企の長つ、み

7 「江戸時代の中期以降、江戸を中心とした経済社会が確立し、街道沿いの宿駅や在町に活発な商取引を行う豪商農が成立し、彼らの文化的欲求により県外の著名な文人が訪れたり、また彼ら自体が直接に江戸に出て文化を吸収しはじめた時代」になっていた。(埼玉近代史研究会『埼玉人物小百科』埼玉新聞社、一九七三年、一六四—一六五頁)

5 まとめ

以上、今までやや不明なところのあった林信海の雅号、「桜園」「山水亭」そして、「芽子の屋」(はぎのや)。「芽の屋」表記も含む)の三つの存在を、自身由来を説明する稿本から明らかにすることできた。

この中で多いのが「芽子(芽)の屋」である。例えば、『詠草二の巻』では、「芽子(芽)の屋」が季節を問わず、一〇例用いられているのに対し、「桜園」は五例、しかも春の桜の咲く庭園を歌うときに限られて使われている。「山水亭」はこの後二年後に付けられたものであるが、用例は多くないようだ。「芽子の屋」の号は後にもよく用いられている。これが信海の万葉集への愛と、学問への決意がこめられた号であったことは、「おのが芽子の屋の記」により確かめられたように思う。

また、明治の女流歌人中島歌子の出身地が信海の村近くで、間接的にはあるが、加藤千浪の名を両者をつなぐものとしてとらえることできたのは、ささやかな収穫であった。

二人のハギノヤの同号については、特別な関係をいうことはできなかったが、ハギがかつては、どんなに人々を引きつけていた花であったかということについては理解できた。ともに身近な庭にハギを植え、生涯その花のたたくまいを愛したのは、武蔵野の八千草の中に美しく咲くハギに親しんだ二人に共通するものであったといえよう。

実は「萩」の名を号とする文人は多い。ハギはかつて多くの文人たちの庭に植えられて、親しまれ愛された花であった。ハギを用いた号は「萩水、萩州、萩園、萩斎、萩坪、萩南、萩陰、萩の戸」等種々ある。ハギノヤを号とする人もある。

その中の一人、明治時代の歌人・国文学者の萩之家(はぎのや)落合直文の場合を取り上げてみよう。直文は文久元年(一八六一)、宮城県

本吉郡松岩村、現在の気仙沼市の生まれで、郷里の「宮城野の萩」は特に親しいものだった。^{注2)}

随筆「野分の風」^{注3)}には、自身の号「萩の屋」の命名が庭に植えた一もとの萩に由来するものであることを述べている。この萩は、四度も転居先の庭に移し植えてきたものであった。作者は亡き妻が愛した萩が、折からの野分の風に倒れ伏しているのを、ただならず嘆いている。それは、萩に亡き人の面影を重ね合わせた万葉集の歌を思わせる。^{注4)}鮮やかに人目を引く花が、四季を問わず売られている現代においては、萩の花も地味な雑草のように見えるかもしれない。^{注5)}信海と中島歌子の号も、秋野を彩る萩の花に人々がかくべつな愛情を寄せた時代にこそ生まれたものであった。

〔注〕

- 1 近代人物研究会『近代人物号筆名辞典』（柏書房、一九七九年）
森銑三、中島理寿『近世人物録集成』第五卷、総索引（勉誠社、一九七八年）
- 2 「萩か花妻」（明治二十四年十一月『国文』、落合直文外『明治文学全集』44、一九七七年、六八頁）
- 3 落合直文「野分の風」（明治二十四年十月『国文』、前掲書、六七―六八頁）の一部を挙げる。

おのか庭に一もとの萩あり。秋毎にその色いとふかく、枝などのしけれるさま、うるはしともうるはし。朝におきてそをななめ、夕にたち出て、それにうち向ひたる心ち、実にたとふべきものなし。おのれ、家の名を萩の家とよべるもこの萩のためのみ、他にまたなにのころかあらむ。（中略）その花、その色は旧時にかはることなし。た、その萩にうちむかふおのがころは、旧時にくらふれば、いたくことなれり。そは

妹のこの世にありしほとは、その萩の花は、おのか心をよるこぼしめたりしに、妹のうせにし後は、おのか心をかなしましむるがごとし。（後略）

- 4 大伴旅人「わが岡の秋芽の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも」（万葉集・八・1542）

- 5 現代の若い世代にとつて、萩は知らない花になりつつあるという。十五年かけての労作、『日本博物誌年表』を最近出版された磯野直秀氏は「今の学生で萩を知っているのは一割弱、桃もそろそろ危ない。」という。（『朝日新聞』「ひと」二〇〇二年十月十二日）

〔謝辞〕資料の閲覧・利用をご許可下さいました林信行氏、埼玉県立文書館にあつく御礼申し上げます。

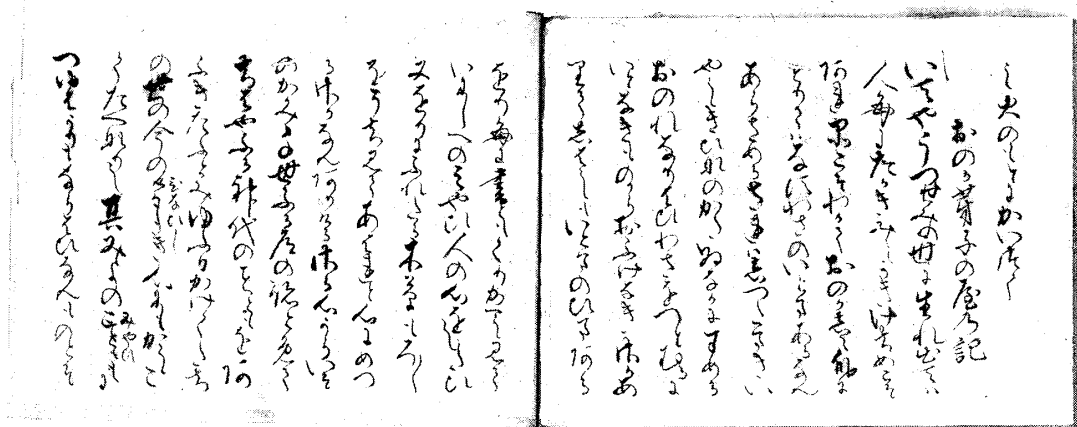
〔参考文献〕

- 狭山古文書勉強会編、林信海『めつらの旅日記』（狭山古文書叢書第九集、二〇〇二年）
- 藤井公明『続樋口一葉研究 中島歌子のこと』（桜楓社、一九八三年）
- 塩田良平「一葉伝記考証」（『大正大学研究紀要』第三九集、一九五四年）
- 塩田良平『樋口一葉研究』（増補改訂版）（中央公論社、一九六八年）
- 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学叢書』第六卷（昭和女子大学光葉会、一九五七年）
- 塩田良平・和田芳恵・樋口悦『樋口一葉全集』第三卷（上）（筑摩書房、一九七九年）
- 岩見照代・北田幸恵・関礼子外『樋口一葉事典』（おうふう、一九九六年）
- 税所敦子外『明治女流文学全集（二）』明治文学全集81（筑摩書房、一九六六年）

- 青木生子・橋本達雄『万葉ことば事典』(大和書房、二〇〇一年)
 平田喜信・身崎 壽『和歌万葉植物辞典』(東京都出版、一九九四年)
 山田卓三・中嶋信太郎『万葉植物事典』(北隆館、一九八五年)
 朝倉治彦監修『江戸文人事典』(東京堂出版、一九九九年)
 國學院大學日本文化研究所編『和学者総覧』(汲古書院、一九九〇年)
 大川茂雄・南茂『国学者伝記集成』(名著刊行会、一九六七年)
 埼玉県立文書館『武蔵国人間郡赤尾村 林家文書目録』(一九八六年)
 坂戸市教育委員会『坂戸の人物誌(第一集)』(一九八〇年)
 川越市教育委員会『川越の人物誌(第2集)』(一九八六年)
 『坂戸市史』近世史料編Ⅱ(二〇〇一年)
 『新編埼玉県史』通史編4(近世2、一九八二年)
 『新編埼玉県史』資料編12(近世3 文化、一九八二年)



林信海詠草冊子



『詠草二の巻』「おのか芽子の屋の記」